

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02637

研究課題名(和文)中国近世の書物における読書符合の成立と展開

研究課題名(英文)Origin and spread of reading marks in the books of early modern China

研究代表者

大木 康 (OKI, YASUSHI)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：70185213

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：中国の古典籍においては、それらが刊行された時点では、本文に句点読点などが施されない、いわゆる白文の状態であるのが普通であった。ところが、時代が下るにつれて、刊行された時から句点、読点、あるいは固有名詞に傍線を施したりした書物があらわれてくる。本研究では、印刷本が主流となる中国近世の書物を通観することによって、句点その他の読書符号の傾向をさぐった結果、それらが宋、元、明と時代を下るにつれて増加する傾向、また、戯曲や小説など通俗的な種類の書物について、それらが多く施される傾向が明らかになった。とはいえ、経書、史書などにそれらが施されることも決して排除されていないことも同時に明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国の古典籍において、それらが刊行された時点では、本文の文字に句点読点などがまったく施されない、いわゆる白文の状態であるのが普通であった。ところが、刊行された時から句点、読点、あるいは固有名詞に傍線を施したりした書物があらわれてくる。それは、おおまかな意味での書物の大衆化を背景にするものと考えられる。庶民的な文藝といえる戯曲や小説、民間歌謡などの書物にそれが多いのは自然であるが、読書符号が施された経書、史書が刊行されたことは、そうした書物自体の通俗化が進んだことがわかる。読書符号の研究は、書物の普及、読者の増加などといった社会の変化とも連動しているのである。

研究成果の概要(英文)：Most of the texts of Chinese Classics were consist only of characters without any marks for helping readers' understanding. However, there appeared books with some punctuation marks, sidelines for proper nouns and so on at the time of their original publication. Surveying marks for reading from the Song dynasty to the Qing dynasty when printed books were the mainstream, I reaffirmed that books with reading marks increased in number as one went forward in time. And I also affirmed the tendency that popular books such as drama and novel had more reading marks. However, books of Classics also did not exclude having reading marks, especially in the Ming and Qing.

研究分野：中国文学

キーワード：句点 読点 中国 近世 書籍史 出版

1. 研究開始当初の背景

本研究においては、句読点、また傍線やカギ括弧その他、読書を助けるための記号を総称して「読書符号」と称することにする。

中国の書物の歴史において、明末の時代には、書物の出版量が格段に増え、『三国志演義』や『水滸伝』などのような長編の通俗小説が続々と刊行されるなど、さまざまな新現象がおこっている。

中国の古典籍においては、それが刊行された時点では、本文の文字には句点、読点などがまったく施されていない、いわゆる白文の状態が大部分であったのだが、この時代に出版された白話の通俗小説などには、刊行された時点において句点が施されているものが見られた。例えば馮夢龍の短編白話小説集「三言」は、そもそも刊行された時点において、点を加えて断句をしているし、同じく馮夢龍の『新列国志』『新平妖伝』は、断句に加えて、人名に傍線を施して、読書を助けている。やはり明末に刊行された『新鐫陳眉公先生批評列国志伝』では、句点に加え、人名には傍線が施され、さらに春秋時代の国の名前、例えば、秦、晋などの文字を 四角で囲む、といった措置が施されている。

こうした読書符号が加えてあれば、白文の場合に比べて、テキストは格段に読みやすくなるであろう。こうした措置は、いったいいつはじまったのか。

これまでも、批評の方法としての評点などについての研究はあったが、読書符号全体についての通史はなかった。

2. 研究の目的

明末の書物を中心とする中国の書物、とりわけ近世（宋・元・明・清）の印刷された書物における読書符号についての通史を描きたいというのが、本研究の目的である。中国明末に刊行された書物を中心に、宋代以降、近世の印刷本を通観し、そこに印刷刊行時点から付されていたさまざまな読書符号を、その種類や時代によって整理することによって、その発展の具体的な様相をさぐり、その社会的背景についても探してみたい。この問題は、中国における書物そのものの歴史のみならず、書物がどのように読まれたのかという読書史、そして読者層の問題という社会史の分野にまで到る射程を持っている。

3. 研究の方法

中国の印刷本に刊行時点から付されていたさまざまな読書符号を整理し、通観することが研究の目的である。従って、できる限り多くの書物を見、時代や書物の内容など、さまざまな切り口から読書符号の種類と展開の状況を追う必要がある。『四庫全書存目叢書』『続修四庫全書』また『傳惜華蔵古本小説叢刊』など大部の影印叢書、また叢書に入らない書物の実物を見、それらを閲覧整理することによって、基礎的なデータを集め、それを整理、分析する。ただし、影印本によっては、そこに加えられた符号が、刊行時点からあったものであるのか、読者によって加えられたものなのか、明確でない場合もあり、そうした場合、あくまで書物の実物を見る必要がある。

読書符号の種類と時代別の整理にあたっては、できる限り多くの資料にあたり、統計的処理の手法も用いたい。

4. 研究成果

科研費による研究開始以前、そして三年間の間に、経史子集四部の書物について、およそ二千点の調査を行なうことができた。その大まかな結果として、次の二点について述べることにしたい。

(一) 経史子集の分類にもとづき、読書符号が付された書物は、やはり集部の詞曲、小説において比率が高い傾向が見られる。しかしながら、同じ集部の書物であっても、別集（個人の詩文集）総集については、読書符号が付された書物が必ずしも多くないことは一つの重要な特徴として指摘するに足るものである。

(二) 明代の嘉靖元年（1522）の序を持つ『三国志通俗演義』（内府で刊行されたものともいわれる）においては、句点のほかに読点（また分号）と思われる点（句点は漢字の右下、読点は漢字の下部中央）を見ることができる。例えば、その巻一冒頭の「祭天地桃園結義」では、

後漢（漢字の真下に白丸の圏点。以下「○」で示す）桓帝崩（句点。漢字の右下に白丸の圏点。以下「句点」で示す）靈帝即位（句点）時（○）年十二歳（句点）朝廷有大將軍竇武（○）太傅陳蕃（○）司徒胡広（句点）共相補佐（句点）

となっている。ここで、「後漢」の後の「○」、「時」の後の「○」などは、今日でいえば、いわゆる読点にあたる点であり、「大將軍竇武(○)太傅陳蕃(○)司徒胡広」の「○」などは、今日でいえば「分号」にあたる点である。嘉靖版の『三国志通俗演義』は、明の内府で刊行されたものともされ、宮廷で刊行された書物においても、こうした読書符号が付された書物が刊行されていたことがわかる。また、万曆十一年の序を持ち、明らかに内府で刊行され、『三国志通俗演義』とよく似た版式を持つ『諸儒箋解古文真宝』においても、例えばその序文「御製重刻古文真宝前序」の冒頭は、

朕觀前代稽古好(漢字の右上に声点)文之主(句点)雖雍容燕間(○)不廢簡冊(句点)
非徒博覽洽聞(○)蓋亦定志養心之助也(句点)

となっており、ここでも「○」は読点の役割を果たしており、ここにはさらに、破音字(一字で意味の違いによって、発音声調が変化する字)の声調を示す声点を見ることができる。漢字の右上に点が付されることによって、「好」の字は、去声に読み、「好い」ではなく、「好む」という動詞であることを示す。いずれも、読者に対するサービスである。

書物が数多く出された明代の後期において、こうしたサービスとしての読書符号を見ることはある意味自然であるが、こうした符号を、宋代に刊行された書物についても見ることができた。宋刊本の『春秋公羊経伝解詁』では、やはり、例えば昭公第十では、読点のほかにも、

元年春(句点)王正月(句点)公即位(句点)叔孫豹会晋趙武(○)楚公子圉(○)齐国
酌(○)宋向戌(○)衛石惡(○)陳公子招(○)蔡公孫帰生(○)鄭軒虎(○)許人(○)
曹人于澗

のように、会に参加した人の名前を列挙する時の、現在でいう分号のような符号を見ることができる。『春秋公羊経伝解詁』は、南宋の紹熙二年(1191)に福建余氏の万卷堂の刊行にかかることが明らかな本であり、どちらかといえば通俗的とされる福建の書物に読書符号が付されているのは、象徴的ともいえる事象である。後世における読書符号の展開は、この延長上にあることが確認できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大木 康	4. 巻 3
2. 論文標題 明末清初の文人・冒襄と香 『影梅庵憶語』から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香文化録	6. 最初と最後の頁 50-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木 康	4. 巻 136
2. 論文標題 銭謙益と程嘉燧	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 OKI, Yasushi	4. 巻 116
2. 論文標題 The History of Bookshops in China : With a Focus on the Early Modern Period	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木 康	4. 巻 98
2. 論文標題 日本江戸時代の「洒落本」と中国文学（韓国語）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大東文化研究	6. 最初と最後の頁 191 217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木 康	4. 巻 1
2. 論文標題 漢籍の「巻」と「冊」再考 北宋版『通典』をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『図書寮漢籍叢考』	6. 最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 文人之楽園 明清江南園林和「園記」
3. 学会等名 明清の文人世界 第五屆古典文学国際学術研討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OKI, Yasushi
2. 発表標題 Shantang Street in Suzhou, 820-1910 ; An Attempt to Show the Fixed-point Observation of Literature
3. 学会等名 Crossing Boundaries: An International Symposium on Chinese Literature and Culture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 宋真宗「勸学文」在東亜
3. 学会等名 2019年度韓国中国語文学秋季聯合国際学術研討会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 蘇州ショウ門的文化經濟
3. 学会等名 中華文物学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 晚明通俗文学の興盛和士大夫之「発現民衆」
3. 学会等名 中国古代小説デジタル学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 明朝記憶の索引 - 清初文人の戯劇和女楽
3. 学会等名 韓国中国語文学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 錢謙益与程嘉燧
3. 学会等名 2018錢謙益国際研討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 「日本江戸時代の「洒落本」と中国文学」
3. 学会等名 17 19世紀における知識・情報の系譜 国際学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大木 康
2. 発表標題 従画像資料看明清時代の歌唱文化
3. 学会等名 通俗文学与雅正文学国際研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大木 康	4. 発行年 2017年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 303
3. 書名 蘇州花街散歩 山塘街の物語	

1. 著者名 大木 康	4. 発行年 2018年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 583
3. 書名 馮夢龍と明末俗文学	

1. 著者名 大木 康	4. 発行年 2017年
2. 出版社 復旦大学出版社	5. 総ページ数 248
3. 書名 馮夢龍『山歌』研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----